

蜻蛉日記にみる女の生き方（1）

開催日 平成 14 年 9 月 28 日

講 師 本学教授 田 中 荘 介

「蜻蛉日記」の作者とはだれなのか。それは、右大将道綱母とか藤原道綱母と称しているが、これは本名ではない。息子の名に母だと付けているだけのこと。紫式部とか清少納言というのも本名ではない。彼女たちは宮仕えをしたので、そのように通称として呼ばれただけのことである。「更級日記」の作者は宮仕えをしなかったので、菅原孝標女というように父の名に拠っている。では戸籍名はなかったのかということになるが、多分それはあったはずである。しかし、日常その名でよばれることがなかったとすれば、それは現代のわれわれと相当に事情が異なるとみなければなるまい。「蜻蛉日記」の作者は兄・姉・妹などがあり、その親戚筋をたどっていくと、紫式部も清少納言も菅原孝標女も、系図の上でつながりをもっている。同時代というにはそれぞれに年齢もはなれているが、たとえば、紫式部と「蜻蛉日記」の作者とは20歳と53歳という年齢のひらきであり、二人はひょっとしてどこかで会ったこともあるのではないかと、私は考えている。それで「源氏物語」が生まれてくるにはどうしても「蜻蛉日記」が存在しなければならなかったのだと、これは近年私の主張しているところである。「蜻蛉日記」はまだ大作を書いていない時期の紫式部に大きな影響を与えた——いや、「蜻蛉日記」はまだ幼いが才覚のみられる、未来の紫式部のために書き綴られたのだといっても、過言ではないだろう。

「蜻蛉日記」は日記と称しているが、回想録であり、体験をもとに彼女の人生観を基底として、平安受領階級の女性の結婚生活の光と影を描き出した「物語」である。身分のあまりにかけはなれた兼家という男性と結婚して結局、正妻の座を得られず、失意のなか、晩年をむかえる女の告白録である。それは虚構の物語以上におもしろい波乱の半生であった。周囲からは文字通り玉の輿に乗ったと言われた結婚生活のスタートだったけれど、期待はことごとく裏切られ、苦渋をなめる日常となり、ついに激情にまかせて石山寺へ逃避行するのである。しかし、彼女は尼になることはなく、苦しみを引き受けるのであった。